

令和俳句論考

蒲生 友紀子

人形の目の一重なる余寒かな

甲斐由起子

鳥移る新樹ふはりと濃くなりぬ

(現代俳句文庫Ⅱ-6『甲斐由起子句集』より)

句集『春の潮』『雪華』『耳澄ます』の各集からの抄という一冊である。約二十年に渡る内容と、抄といういわば昇華された内容である。多くを学ばせていただいた。一句目、日本人形は切れ長の一重の目元に美を感じる。おみなごを祝う雛人形も然りである。愛らしさを祝う雛の間において、人形の目元にクローズアップする。「余寒」が利いている。二句目、新樹の生命力溢れる景である。鳥はめまぐるしく木々を移っていく。その移っていった先の新樹が「ふはりと濃く」なったと作者は言う。この「新樹」は大きな樺だろうか。鳥の賑やかさ、木のぐんぐん枝葉を広げるさま。緑はまだ深まる余地がある。だが、鳥が移ることによって、しなり具合等によって、一瞬色が濃くなって見える。「息をして水を汚さず寒の鯉」にも心引かれた。集中の両親・師との別れの句も大いに心揺さぶられた。

氏は「天為」同人。

燃やしたき手紙のしめり走り梅雨

井上げい子

迂闊にもこの世に着地落雲雀

(第三句集『アラベスク』より)
昭和六年生まれの氏の第三句集。さまざまなことを経験してこられたことが、苦味とも感じる作品の味わいによって伝わってくる。

一句目、「燃やしたき手紙」は燃やせない手紙でもある。それがまた湿りを帯びる季節が巡ってきた。そうしてその手紙をまた手にしているのである。二句目、「迂闊にも」がユーモラスに響いてくる。この世に着地したのは、この世に生きている人間すべてである。だが、私たちは普段まるでそれに気づかないように生活している。そして下五「落雲雀」で受けている作り方。作者はクールにその様を詠む。集中、大川小学校を初めとする東日本大震災やコロナ禍、記憶を遡っての第二次世界大戦、原爆忌など、いたましい日本人の傷口を真つ向から詠む作品も多い。一方で多く訪れた巴里などの海外詠もあり、読み応えのある句集であった。氏は「遊牧」同人。

稲の穂に風重く来て軽く抜け
街川の引き潮に散る百日紅

天野美登里

(第二句集『寄居虫』より)

集中、海外や登山の景もあったが、日常的に自然の豊かさを味わっているような句を多く感じた。掲句一句目は稲穂である。作者は「風重く来て軽く抜け」と詠まれた。直感で感じられたのだろう。風が「重く来」るのは、稲穂が大きな音を立てるからではないか。対して「抜け」るのは音を立てない。作者の住む長崎県大村市は、海風が強く「重く」来るのだろうかと思像した。二句

目は「街川」とあるが、引き潮の影響を受ける川である。そこに百日紅が散っている。おそらくここにも風が吹いている。

氏は「やぶれ傘」同人。

大空へ延ばす素麺春の風 吉井たくみ

木枯や剥がされてゆく里の色

(第一句集『末踏の天』より)

氏は群馬県出身で、農林水産省や内閣府、消費者庁勤務をされてきた。熊本勤務時代に俳句と出会ったそうである。「阿蘇」に入会し、東京に戻るにあたり、師の岩岡中正氏より深見けん二氏を紹介され「花鳥来」に入会。「花鳥来」終刊後、後継誌「初桜」、そして「櫻草」にも入会されている。阿蘇へは毎月飛行機で通われているようだ。一句目、素麺の制作過程の一場面。「大空へ延ばす」がなんとも心地よい。季語「春の風」も伸びやかさを加えている。二句目、退官後の群馬県での作であろうか。いよいよ冬を迎える木枯らしが吹いてきた。紅葉の美しかった里も色を失ってゆく。それを「剥がされてゆく」とした比喩表現に引かれた。作者が見ている里景色の変化を、読者も共に、まるで鳥瞰しているように感じる事ができた。

氏は「阿蘇」「初桜」「櫻草」同人。

あをあをと日本の雨や更衣 篠原 隆子

清らなる地を一つ踏み舞始

(第一句集『一つ踏み』より)

「俳句は音楽でなければいけません」との「古志」の大谷弘至主宰の言葉に、氏は俳人になりたいと思われたそうである。句集

冒頭の「あをあをと」の句に感銘を受けた。「あを」が見事に滴り落ちていく。「更衣」が更にその効果を高めている。空気が清められた気がした。二句目も然り。新年詠であるので、「清らなる地」と言祝ぎ、さらに清めの効果が高い。集中には他にも舞や能舞台や小面というモチーフがあるが、あとがきに、氏は舞踏の振り付けを仕事としたとある。また、「バグダッド追想」として、やがて湾岸戦争につながるイラン・イラク戦争時に滞在していた頃の追想句が掲載されている。その頃支えてくれた人々の現在を案ずる作者の気持ちが伝わってきた。

氏は「古志」同人。

渾身に朝日ふふめる牡丹の芽 吹井 紫乃

桐下駄の軽さ身に添ふ稲架日和

(第一句集『八十路の風』より)

約三十年の間の作品を、春夏秋冬新年の句としてまとめるなら区切りとなると上梓されたとのこと。一句目「牡丹の芽」が焦点化され、それ全体が朝日の強い光を含んでいるという、まことに明瞭、かつくつきりとした映像が浮かんだ。「渾身」という語は「全体」という意味だが、「渾身の力」という使われ方からか、強さを含んでいるように思えた。二句目、上五中七は季節を問わない事実だと思うが、「稲架日和」が空気の乾き具合や、豊作・収穫の喜びなどを含み、湿度的にも心理的にも取り合わせに納得がいった。桐下駄でステップでも踏んでいそうな軽やかさがある。

氏は「湧」同人。

(筆者住所 〒309-1622 茨城県笠間市南吉原二七九一五)